

新収蔵品展 ― 学芸員が選んだおすすめ50 ―

主な展示作品

開催期間 2020年9月15日(火)～11月8日(日) ※前後期で一部展示替えを実施
 前期 9月15日(火)～10月11日(日)、後期 10月13日(火)～11月8日(日)

本展では、すみだ北斎美術館に足をお運びくださるお客様に、開館以来新しく加わった、肉筆画、版画、版本といった多様な作品の中から北斎や門人の作品を分類ごとにバランス良くご覧いただけるよう、合計50点を選び、前後期に分けて展示します。

≪版画≫ 「富嶽三十六景」の三役 「神奈川沖浪裏」(前期)、「凱風快晴」(後期)、「山下白雨」(後期)

北斎の代表的な作品である「富嶽三十六景」。その中でも特に優れた作品とされることから三役とも呼ばれ、北斎の代表作として名高い「神奈川沖浪裏」、「凱風快晴」、「山下白雨」は本展でも必見です。



葛飾北斎「富嶽三十六景」より「神奈川沖浪裏」(前期)、「凱風快晴」(後期)、「山下白雨」(後期)、いずれも吉野石膏コレクション、すみだ北斎美術館寄託

≪版画≫ 北斎が描いた百人一首

葛飾北斎「百人一首うはかゑとき 安倍仲麿」(前期)



葛飾北斎「百人一首うはかゑとき 安倍仲麿」(前期)すみだ北斎美術館蔵 (右は部分)

「百人一首うはかゑとき」は、乳母が子どもに百人一首の和歌を一首ずつ絵で解説するために描かれた大判錦絵シリーズです。本図は、安倍仲麻呂(*1)が異国の地・唐で月をみたときに、故郷を想い詠んだ歌「天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも」を絵解きしています。

仲麻呂(画像中央)は高台に登って遠く月を眺めています、月は水面に映る影のみで表現され、故郷を懐かしむ仲麻呂の心情がうかがえます。

*1 安倍仲麻呂: 奈良時代の遣唐留学生で、唐の皇帝玄宗に仕えた人物。海難に遭い日本へ帰国できず、唐の地で没しました。

『十嘉栄利花』は、山賊の鬼柳盗太^{おにやなぎとうだ}によって家族を殺害された志津子らの仇討の物語が綴られた読本(*2)です。挿絵は、北斎の門人・北岱(*3)が手掛けました。

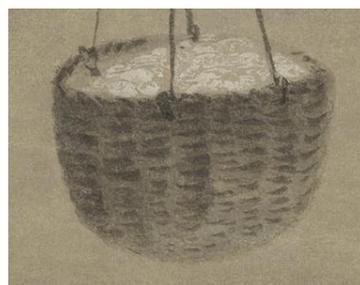
本図は、前後のページの文章には明記されていない、志津子が鬼柳盗太に復讐の執念を募らせる心情を描写していると思われます。全体の半分に巨大な顔を配置した画面構成に加え、髪の毛や着物の柄の細かな表現にもご注目ください。



葛飾北岱『十嘉栄利花』(通期) すみだ北斎美術館所蔵

*2 読本: 江戸時代中期以降、幕末まで刊行された小説の一種です。文章を読み進めると、絵師による挿絵のページが現れます。

*3 葛飾北岱(ほくたい): 生没年未詳。北斎の門人の1人で、狂歌師としても活動した人物です。



葛飾北斎「蛤売り図」(後期) すみだ北斎美術館蔵 (左は部分図)

月明かりのもと佇む棒手振^{ぼてぶり}が描かれています。作品の上部には、狂歌師によって以下の賛が書き込まれています。

「蜆^{しじみ}かと思ひの外の蛤^{はまぐり}は けにくりはまに思ひつき影」

蜆^{しじみ}かと思ったら蛤^{はまぐり}で、まさに「ぐりはま」だと歌われています。「ぐりはま」とは、物事の手順や結果が食い違うという意味の、蛤の「はま」と「ぐり」を逆さにした言葉です。本作は当初、表具や付属品の作品名を記す部分に「蜆売」と書かれていたため「蜆売り図」と考えられていました。昨年、作品を改めて調査したところ、貝殻が胡粉(*4)で表されていることから、かごの中の貝は蛤(はまぐり)であるとわかりました。

*4 胡粉(ごふん): 貝殻(特に牡蠣の殻)を焼いて粉末にした、白色の顔料。